掛川で学ぶ

～開発手法と報徳の精神～

今、NHK 大河ドラマで「**どうする家康**」を放送中ですが、徳川家と脈々とつながっている静岡県。中でも、東洋一といわれる広大な牧之原台地の大茶園。広さは東京ドーム約 1,063 個分、5,000 ヘクタールにもなり、新茶摘み採りの季節には台地一面が鮮やかな緑色に染まると言います。その歴史は、明治初期江戸で活躍した徳川家臣団の武士達による開拓から始まりました。

【静岡県　牧之原台地】

慶応 3 年(1867 年)、15 代将軍の徳川慶喜は大政奉還により駿府(静岡市)に隠居します。警護のために同行した武士達は、明治時代になってその役を解かれ、職を失ってしまいます。

そこで明治２年(1869 年)、刀を鍬に持ちかえて新たな就業の場として、荒れ野原だった牧之原台地における茶畑の開墾を決断しました。当時、すでにお茶は輸出品として重要であり静岡県内にはいくつかの茶産地が形成されていました。それにならい武士達は団結して牧之原緑茶の生産に励みました。

先日、そんな歴史がある牧之原台地の茶畑（島田市）のお茶研究所（㈱アイング総合研究所）を訪ねて、日本茶の魅力を紹介していただきました。

【水出し茶の魅力】

㈱アイング総合研究所の物部（ものべ）所長のお話しによると、水出し茶はお湯出し茶に比べ、カフェインが少なく、リラックス効果があるそうです。また、カテキンの中でガン抑制力が一番あると言われるエピガロカテキンが豊富に含まれていて健康にとても良いそうです。また、水出しにはテアニンという物質も豊富に含まれており、これによりリラックス効果や安眠効果があると言われております。私も直ぐに水出し緑茶を作ってみました。作り方は簡単で、容器に茶葉と水を入れて一晩冷蔵庫に置いておく

だけで苦みのないおいしい緑茶のできあがりです。冬場は、電子レンジでチンしてホットにしても良いそうです。こんな緑茶の飲み方があったなんて知りませんでした。

私は最近、熟睡する時間が短く良質の睡眠が出来ていない状態でしたが、この緑茶を飲むようになったせいかすごく良く眠れています。教えていただいた物部（ものべ）所長に感謝を申し上げます。

【掛川市訪問】

牧之原台地を後にし、数年ぶりに掛川市を訪問させていただきました。今回の目的は掛川市の行っている開発の手法の視察です。掛川市と同じく国内交流をしている三重県明和町の世古口町長も話を聞きにご参加していただきました。

【左から、私・掛川久保田市長・三重明和世古口町長】

掛川市は、遠州灘に面した海岸線と牧之原台地から大井川を挟んで連なる山間部を持っています。面積は明和町の 14 倍、人口は 10 倍の自治体です。財政規模も明和町の約 10 倍です。

そんな中、特筆すべきことは明和町と同じ土地開発公社を使って開発をしておりますが、明和町に無い開発手法を使っての開発を行っています。

山間部の開発においては、約４２ヘクタールの工業団地を造成しています。山を切り開いての開発のため開発費が莫大に掛かります。そこで、民間業者と組み、代物弁済方式で開発していました。民間業者による造成販売となり、販売代金は民間業者のものとなりますが、開発時の費用や工事代、金利も民間負担で、官公庁のリスクを減らせる利点があります。官公庁のリスクを減らし、進出企業の固定資産税や法人税は市に入ります。そんな開発現場と手法を見せていただきました。

【海岸防災林強化事業】

また、市街地では立地適正化計画による未利用地等の宅地化・市街化の開発の促進を行い、そして、公用地拡大の推進に関する法律だけでなく、事業の加速化のため、特別会計を使った手法でも開発をしておりました。まさに目から鱗が落ちた感じです。

そして、遠州灘から津波が押し寄せても大丈夫なように、山の開発等で出た残土を活用して土山で防湖堤を作り、木を植えて自然林のような壮大な総延長 9.0 キロの海岸防火林強化事業の建設には迫力がありました。そして、総予算は 10 年間で約 50 億円。この事業については、90%を起債で行っており、その起債の償還金は地方交付税の需要額に算入されます(割合は約 7 割)。実質的な市の負担は、約 4 割となる手法です。

掛川市の職員の諸問題への対応は、出来る方法を全て逆算で計算し、考え思考をする事が出来る組織と大変感心させられました。

【大日本報徳社掛川市訪問】

掛川市には、山内一豊で有名な掛川城がありますが、そんな掛川城の東には二の丸御殿が当時のまま国の重要文化財（内覧可能）として保存されております。その二の丸御殿の東側に大日本報徳社があります。

【大日本報徳社門前にて】

江戸時代後期の農政家である二宮尊徳(小田原出身)の弟子達が集い、尊徳が唱えた報徳思想の普及の拠点となった場所です。二宮尊徳の指導を受けた岡田佐平治が掛川市の人だったことから、ここに建立されたそうです。

二宮尊徳と言えば、かつて小学校の校庭で見かけた「二宮金次郎像」です。金次郎像を広めるのに一役かったのが大日本報徳社です。

ただ、かつてどこの小学校にでも見かけた二宮金次郎象は最近あまり目にしなくなりました。

昨今、現存する金次郎像を撤去する動きがあるそうで、その理由が、「歩きながら本を読むことを助長するから危険」、「子供が働く姿は今にそぐわない」など、ちょっとびっくりです。狭い了見で、物事の本質を捉えることの出来ない、更に、歴史を知らない大人が増えてきている。本来ならば、金次郎の精神を学んでいただきたいところであります。

さて、報徳社の門を見て驚きました。向かって左側の門には「経済門」、右側の門には「道徳門」と書かれています。

横にあった解説板を読むと、以下のように書いてありました。

“明治 42 年(1909 年)2 月に建設。花崗岩製の 2 本の門柱からなっており、道徳と経済の調和した社会づくりを目指す報徳の教えを象徴している。金次郎の、報徳の教えの中の「天地の徳に報いるには、内にあっては天賦の良心を養成(道徳)し、外にあっては、天地の恵みである作物の育成を助ける(経済)ことである。」”とあります。

これからの日本は、二宮尊徳の「道徳」の思想だけではなく「経済」的な手腕にも光をあてて、再評価していく必要があるかもし

れません。

二宮尊徳は、農村改善の指導者となって数百に及ぶ町や村を立て直したと言われます。どのように人々とともに改善策を立案・実行したのか、どのような手法で資金を集めて、どのように投資したのか。まだまだ興味は尽きません。

令和５年７月２１日

明和町長　冨塚もとすけ